# 紅茶を通した世界とのつながりと日本の消費者
## 講演会アンケートから見えてきた消費者の意識と可能性

栗　原　俊　輔

### はじめに

紅茶は日本人にとって身近な飲み物であると同時に、そのほとんどが海外からの輸入である[1]。紅茶の生産地としてはスリランカ、インド、中国、ケニアなどがあるが、いわゆる嗜好品である紅茶は、日本への輸入元がフランスやイギリスなど、これら紅茶の生産国の元宗主国などであることが多く、直接スリランカやインドからの紅茶が包装され流通することは少ない。

日光市国際交流委員会が主催している国際理解講座は「食を通した国際理解」をテーマとし、毎回その国の食べ物や飲み物を講座参加者に提供し、その先に見えてくる各国での暮らしや状況を身近に感じてもらうという形式の講座であり、地域での国際理解促進の一環となっている。

今回は筆者が長年居住していたスリランカについて、「日本 スリランカ 紅茶を通したつながり」と題して、スリランカの名産である紅茶（セイロンティー）および現地の伝統的な菓子などを味わってもらいながら、そのセイロンティーの先にある、スリランカの紅茶プランテーション農園に居住する労働者とその家族についての講演を2014年9月28日に日光市にて行なった。

また、講演会終了後にスリランカの紅茶プランテーション農園の労働者および日本で日ごろ飲んでいるセイロンティーについてのアンケートを実施した。このアンケートは、講演会の感想に加えて、講演会で知ったスリランカ紅茶プランテーション農園の労働者の人々の生活環境やプランテーションの成り立ちを知り、セイロンティーの消費者である日本人として、何を感じ取ったか、特に消費者として現地生産者側の問題に日本の消費者は責任があるのかを調べる目的で実施した。

スリランカには19世紀のイギリス植民地代を中心に開拓された紅茶プランテーション農園が286箇所あり[2]、現在でも植民地時代とほぼ同様の方式で紅茶が生産されている。また、26年に亘ったスリランカ内戦が2009年に終結し、国全体が経済発展へ向かっている中でも、同国中部山岳地帯に広がっている紅茶プランテーション農園に居住するタミル系住民はその発展のプロセスから取り残されているのが現状である。

一方、産業としてのセイロンティーは高級茶として世界中で流通しており、紅茶の輸出量としては常に世界で上位に位置している。また、日本への紅茶の輸出においてもスリランカが1位であり、2位のインドに輸入量、金額ともに5倍以上の差をつけている[3]。また特筆すべきこととして、宇都宮市は紅茶消費量がここ数年常に上位に位置しており[4]、日本の中でも紅茶が身近な地域であると言える。

そこで、このような背景を考慮して、今回の

1　静岡県や京都府宇治地方、栃木県那須地方などでは、緑茶農家が紅茶も生産をしているが、その量はごく少量であり、大量生産品として全国に流通するほどではない。

2　紅茶のほかに天然ゴム、胡椒等のスパイスおよびココナツのプランテーションがある。Ministry of Plantation Industry, Sri Lanka（2012）, Statistical Information on Plantation Crops.

3　日本紅茶協会「紅茶会報2014年2月輸入先国別輸入数量と金額」（2014）。

4　総務省「家計消費調査」2008年から2013年までの各年における紅茶消費量

国際理解講座では日光市が毎年行っている食を通した国際理解の基本方針に則った上で、紅茶が実は宇都宮市および周辺地域では非常に身近な飲み物であること、その紅茶の約60パーセントがスリランカより輸入されているセイロンティーであることをどのように感じるか、そしてスリランカの紅茶プランテーション農園に居住する労働者とその家族についてどのように感じたか、アンケートを行う許可を日光市国際交流協会からいただき、実施した。

食を通した国際理解講座という性質上、その国の名産などを講座で実際に提供し、参加者に味わってもらい、そこから現地での文化や暮らしへと話題を拡げていくなかで、現地の食と文化に加えて、どのような人々が生産し、どのような暮らしをしているのか、そして彼らと私たちのつながりはどのようなものなのかを実際に参加者自身が考えを巡らす機会となるべく、講演を進行した。

また、日本では高級なイメージのある紅茶という飲み物が、生産国のスリランカにおいては極めて日常の飲も物であり、必ずしも高級な飲み物ではないことや、日本とスリランカでは紅茶の飲み方や消費されている茶葉のグレードも違うこと、それは紅茶がイギリス植民地時代に導入されたプランテーション作物という位置づけが影響しており、現在でもほとんど変わりがないことなどを講演にて話し、日本とは違う生産国側の紅茶の新たな一面を参加者に知ってもらい、その上で日本の私たちとスリランカの紅茶プランテーション農園の労働者がどのようにつながっているのか、またはつながっていないのかを考えてもらった。

21世に入り、世界はますますグローバル化という現象に大きく影響され、私たちの日ごろの消費活動においても、日本国内だけではなく、多くの国々とのつながりを感じ取ることができる。しかしながら、生産者側が一体どのような人々なのかを知ることは多くはない。これらの視点を参加者にも感じてもらえるよう、講演内容を計画し、アンケートを通じて一般消費者の生産国側への関心度や、世界とのつながりへの意識、そしてこれからの国際理解・交流への可能性を探るひとつの足掛かりとした。

講演内容は、1）スリランカについて、2）セイロンティーについて、3）セイロンティーと日本のつながりについて、4）セイロンティーを作る人々について、5）農園の人々のくらしについて、そして6）紅茶を通したつながりについて、という構成で実施し、紅茶という飲物の歴史と生産国側の歴史の双方を、順を追って理解できるように配慮した。

参加者は16名と多くはなかったが、質疑応答でも予定の時間を過ぎるほど、双方向で活発な講演会となった。質問も紅茶そのものについてのほかに、スリランカの紅茶プランテーション農園のエステート・タミル人へ私たちがどんな支援ができるのかなど、積極的な質問が多かった。

今回はこの講演会アンケート結果および、同様の内容の資料を配布し、アンケートを実施させていただいた宇都宮市内の紅茶店「Y's TEA[5]」の顧客からのアンケート結果を合わせて集計点分析した。これらをもとに、紅茶を通した、消費者としての私たちと生産国側の労働者との新しいつながりの可能性について考察する。

## Ⅰ. 講演背景

### 1.スリランカの紅茶プランテーション

セイロンティーの名前の由来は、スリランカの植民地時代の名称から来ているが、19世紀にすでに高級茶として世界的にも有名であったため、1975年に国名がスリランカに変わった後も、紅茶に関してはセイロンティーの名称を

5　http://y-tea.shop-pro.jp/

引き続き使用している[6]。

現在でも高級茶として世界的ブランドを維持しているセイロンティーは、スリランカにとっても外貨獲得のための主産業という位置づけはイギリス植民地時代も、そして現在でも変わっていない。世界の紅茶生産国の中でも常に上位に位置しており[7]、スリランカにとって今後も発展させていくべき産業であることはゆるぎない。

一方、日本に輸出される紅茶のうち、実に60％がスリランカからのセイロンティーである。これには高級茶から、ペットボトル等の紅茶飲料に使用する比較的廉価な茶葉も含まれる。すなわち、日本で紅茶を飲むと、かなりの確率でセイロンティーであることが多く、日本の消費者が特に意識せずともスリランカ産の紅茶を口にしていることが多いといえる。

## 2.セイロンティーの生産現場

このように日本人にとっても深くつながりのあるスリランカの紅茶は、19世紀のイギリスによるキャンディアン王朝の征服そして植民地化によって始まった。すなわち、シンハラ人やタミル人をはじめとした、もともとスリランカに住んでいた民族が自発的に興した産業ではなく、植民地化後にイギリスにより導入されたものである。そもそも茶の木自体も自生していなかった。そのため、1,000年以上の茶栽培の歴史および文化がある日本と比べるとスリランカにおける茶栽培や紅茶生産の歴史は比較的浅い。

スリランカのプランテーションには紅茶をはじめ、天然ゴム、スパイス、ココナツがあり、紅茶はその中でも現在でも大規模に栽培がされており、同国中央部山岳高原地帯から南部へと広がっている。エステート・タミルと呼ばれるインド系タミル人[8]がプランテーション農園に居住し、労働者として従事しているが、彼らの子孫は、プランテーション開拓時に、イギリスにより南インドのタミルナドゥ州より移入された人々であり、基本的にはその子孫が現在も当時と同じ農園に居住している。スリランカの紅茶農園では、現在でも同じ作物を150年前と同様のシステムで生産している、ということになる。

スリランカ[9]にプランテーションが導入されたのは、19世紀のイギリス植民地時代、イギリス人入植者によって1839年にコーヒー農園が初めて開拓されたことに始まる。当初はスパイスや天然ゴムそしてコーヒーが主作物であり、紅茶の栽培はコーヒーがさび病で壊滅した後に本格的に導入されたものだが[10]、結果的にはスリランカ経済の主要産業に成長し、2013年にはGDPの17%を占めており[11]、現在でも

6　2005年に現大統領が就任するまでは、バス公社（Ceylon Transport Bureau）をはじめセイロンの名称を使用していた公社も見られたが、現在でもセイロンを使用しているのはCeylon Electricity Bureau）くらいである。

7　生産量1位は中国。以下2位インド、3位ケニアと続き、スリランカは4位であるが、輸出量ではケニアに次いで2位である（FAOSTAT Data 2008）。

8　紀元前よりスリランカ北東部に居住していたタミル人と、イギリスがプランテーション労働者として南インドよりスリランカ中部・南部のプランテーション地域に導入したタミル人とは現在も統計上も分けられており、北東部のタミル人をスリランカ・タミル、プランテーション労働者として導入されたタミル系住民をインド・タミルと区別している。最近はインド・タミルよりもエステート・タミルという呼び方を好む人も多く、インド・タミルという呼称は統計以外に日常ではあまり使用されなくなってきている。これは、現在はインド・タミルもスリランカ市民となっていることと、南インドから移入されてすでに3代目から4代、5代目と世代が変わってきたことが大きい。

9　イギリス植民地時代および戦後のイギリス連邦内自治領時代の国名はセイロンであったが、本論文では文脈上セイロンと表記すべき箇所以外はすべてスリランカとする。

10　1869年にコーヒーさび病が発見され、スリランカ中のコーヒー農園に広まり、1870年代に壊滅し、本格的に紅茶へと転換された。

11　Sri Lanka Export Development Board, http://www.srilankabusiness.com/find-sri-lankan-suppliers/product-profiles/tea （May 15, 2014）

国の基幹産業である[12]。

プランテーション農園の最大の特徴は、その労働力確保にある。イギリスにより南インドから移入されたタミル人労働者は、安価な労働力としてプランテーション経営の軸をなしてきたが、この制度はいまだに変わらない。

また、労働者管理システムは、農園労働者とその家族を住まわせ、農園内で生活をすることにより、農園経営者が労働者を効率的に管理しやすくなっていることが大きな特徴であり、いまだ非常に封建的な労働環境であるといえ、植民地時代とほとんど変化が無いシステムである。

この背景には、第二次大戦後にスリランカが英連邦セイロンとしてイギリスから独立した際に、紅茶農園のエステート・タミル人には国籍が認められなかったことと、スリランカ独立後もプランテーションは私有地として扱われ、プランテーション農園内に居住するエステート・タミル人への社会福祉、福利厚生はプランテーション経営者の管理下というシステム自体は変わらなかったことが大きい[13]。エステート・タミル人に、申請をすればスリランカ市民権付与を認める法律が成立したのは、1988年であり、その後エステート・タミル人全員に市民権をみとめたのは2003年とつい最近のことである。

そのような経緯もあり、紅茶プランテーション農園に居住するエステート・タミルの人々の暮らしは、21世紀においてもスリランカの一般的生活環境と照らしあわせると問題が多い。生活環境や習慣、および行政サービスなどに問題点が見られ、これらは住民の努力だけでは解決の難しいものも含まれており、政府および国際社会の本格的な取り組みおよび支援なしには改善は難しい。

農園内で特に問題となっているのは、女性への過度な労働・家事負担である。女性は労働者として主に茶摘みをしているが、だからといって火事が男女間、夫婦間で分担されているわけではない。女性は家事全般、子育てを担う上に農園労働も行い、体力的、精神的な負担は大きい。

また、一般的にスリランカでは女性の飲酒・喫煙率は低いが、農園内のエステート・タミル人の間ではこの限りではない。植民地時代から変わりのない、外界と隔離された環境が男女ともに飲酒や喫煙へと走る傾向がある。

また、農園居住者コミュニティ内での風紀の乱れも深刻度を増している。家庭内暴力やコミュニティ内での抗争などが少なくなく、これは植民地時代から連綿と続くプランテーション農園の居住区に住み続けているという、ある種の閉鎖的環境に加えて、地理的に外界から隔離された空間であることが影響している。

このように、スリランカの紅茶プランテーション農園に居住するエステート・タミルの人々の紅茶農園労働とその暮らしは、その産物であるセイロンティーの持つ高級感とは現在でも正反対の状況であり、特に21世紀にはいりグローバル化が進む世界においてはますますその差が顕著に表れていると言える。

講演会においては、これらスリランカ紅茶プランテーション農園の現状を、セイロンティーとスリランカの茶菓子を実際に提供しながら、写真を交えて紹介した。

## II. 講演会

### 1.スリランカの「食」を試す

講演会は1）講演会1時間程度および2）質疑応答30分程度という構成であったが、質問

12 栗原俊輔「農園労働者コミュニティから市民のコミュニティへ　スリランカ 紅茶プランテーション農園に居住するエステート・タミルのスリランカ市民への道のり」、宇都宮大学国際学部研究論集第38号、2014年9月

13 Article 33, of the Pradeshiya Sabha Actにより、農園内は私有地として扱い、行政サービスは農園内まで提供する義務はないと定義している。

が多く出たため、実際には２時間近くの講演となった。

はじめに、スリランカのセイロンティーと菓子を参加者に試飲・試食してもらい、それぞれの紅茶の種類およびスリランカの伝統菓子の説明を行った（写真1）。セイロンティーは通常のプレインティーの他にフレーバーティーと呼ばれる、茶葉に香りを付けたものも用意し、最近のセイロンティーのバラエティーを味わってもらいながら、それぞれの茶葉のグレードや種類を説明。

紅茶に関しては、いわゆるプレインティー以外にも様々な種類の紅茶を飲まれたのは多くの参加者にとってはじめての経験であったようである。また、紅茶とともに提供したスリランカの伝統菓子は、通常とても甘いものをお茶うけに出すが、今回は生菓子の提供が難しかったため、乾燥菓子のみの提供とし、参考までに辛い菓子も提供した。

（写真１セイロンティーとスリランカ伝統菓子を試す参加者）

本来紅茶プランテーション産業は、茶葉から紅茶へと製茶した後にオークションにかけられ世界中に流通していたが、近年はスリランカ国内でフレーバーティーとして付加価値を付けるという、スリランカの紅茶関連企業の取り組みも始まっている。これらは植民地的経済システムからの脱却でもあり、スリランカ国内での紅茶関連企業に多く見受けられるようになっている。

一方、スリランカでの紅茶の飲み方はミルクティーに砂糖を多く入れる飲み方が主流であり、フレーバーティーは一部の上流階級やスリランカ在住外国人などが主流である。スリランカでのミルクティーは、ダストと呼ばれるグレードの低い茶葉が使われるが、これは、本来高級茶はすべて輸出用であったことも影響している。

紅茶と菓子の試飲・試食の後はスライドを使用しての講演にて、紅茶産業と紅茶を生産している現地の人々の暮らしについてなどを、写真を多用しながら進行した（写真2）。

（写真２講演会風景。日光市役所にて）

**2.参加者の反応**

１時間程度の講演の後に、質疑応答を行ったが、予定の30分を超える盛況ぶりであった。紅茶を通して見るスリランカと日本のつながりという演目の通り、参加者の多くから、セイロンティーの消費者としての日本人が果たすべく役割や大義は何か、または、そもそも消費者に責任はあるのか等の質問やコメントが質疑応答の時間にも寄せられた。

スリランカの紅茶プランテーション農園に先祖代々居住し、紅茶農園労働者として働いているエステート・タミル人の暮らしは、明らかにセイロンティーを日々飲んでいる日本人の暮ら

しよりも過酷であるが、彼らの暮らしを改善するためにはどうすればよいのか、また日本人は何ができるのかなど、踏み込んだ意見や質問も寄せられた。

質疑応答の際に一番多く聞かれた意見は、セイロンティーの生産国側では、いまだにこのような生産方法と植民地然とした経営体制であることは全く知らなかったというものである。知っていれば、紅茶に対する見方も違っていた、また、このようなことは日本の消費者にもっと広く知らせるべきであるという意見も聞かれた。

一方、参加者に高齢の方が多く、イギリス時代からスリランカ独立初期の名前であるセイロンのほうが親しみもあり、スリランカと聞いても以前のセイロンのことであるとは今まではっきりとは認識しておらず、セイロンティーがスリランカで生産される紅茶であるとはあまり気にしていなかったという意見も少なからず聞かれた。

## Ⅲ. 紅茶を通したつながりを実践するために

### 1.参加者アンケート結果から見えてきたもの

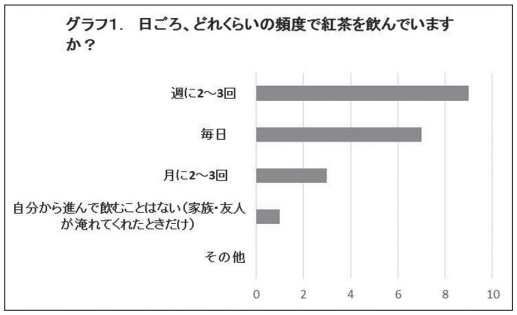
今回の国際理解講座では、参加者16名のうち、アンケートに回答してくれた方は15名である。また、Y's TEAを通して5名が同じアンケートに回答。これらを合わせて計20名である。データを分析し一般化するには若干母数が少ないが、いくつかの興味深い結果が得られた。

アンケートは大きく3項目に分けられ、それぞれ1）紅茶について、2）スリランカと紅茶プランテーション農園労働者について、そして3）回答者本人についてとなっている。

#### 1）紅茶について

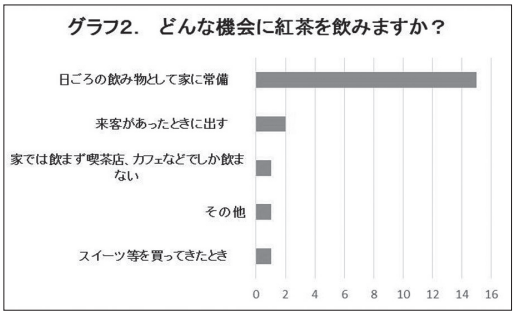
宇都宮市は近年紅茶の消費量が全国でも上位を占めるほどになっているが、アンケートの回答からもそれが見て取れる。

回答者の半数以上が、毎日または週に2～3回は紅茶を飲んでいると回答。その他の回答者も、自分から進んで飲むことは無いと回答した一人を除いて月に2～3回と、紅茶を飲んでおり、紅茶に接する機会は多いと言える（グラフ1）。



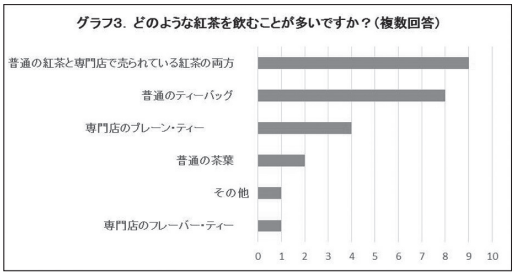
グラフ1.　日ごろ、どれくらいの頻度で紅茶を飲んでいますか？

紅茶を飲む頻度の高さは、どのような機会に紅茶を飲むかという問いへの回答にも顕著に表れ、ほとんどの回答者（15名）が「日ごろの飲物として家に常備」と回答している（グラフ2）。

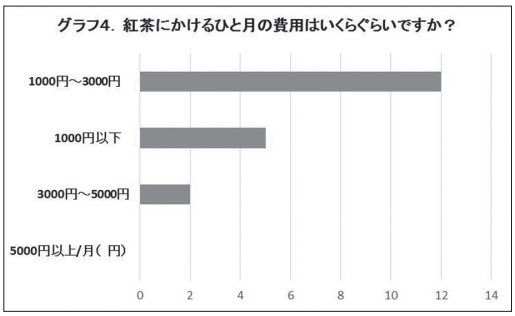


グラフ2.　どんな機会に紅茶を飲みますか？

紅茶を飲む頻度（グラフ1）と併せて見ると、紅茶という飲物が日常生活にかなり浸透している飲物であるといえる。また、日ごろ飲む紅茶の種類も、普通のティーバッグと専門店で売られている紅茶の両方が一番多く、普通のティーバッグがそれに続く（グラフ3）。




一方で普通の茶葉を常用しているとの回答は意外に少なく、茶葉よりもむしろティーバッグを多く飲んでいるといえる。これはグラフ４で示された。紅茶の毎月平均購入価格からも見えてくる。




通常大型店などで販売されているティーバッグは 50 袋入りで 500 円前後であり[14]、紅茶専門店で販売されているリーフティー（茶葉）などは 50 グラム程度で 1,000 円前後が平均価格である。専門店の紅茶を毎日飲むとなると、一か月の紅茶購入額がかなり大きくなり、これを考慮すると、通常のティーバッグを中心に、週に２～３度からほぼ毎日紅茶、たまに専門店の紅茶を飲み、一か月に 1,000 円前後を消費しているという状況が見えてくる。

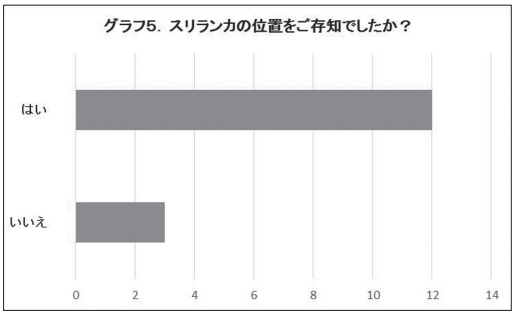
紅茶自体は日常生活に溶け込み、非常に親しみのあるものとなっているところに、近年はフレーバーティーや高級茶を扱う専門店の紅茶も浸透しはじめていることがうかがえる。

14 日東紅茶ティーバッグ50袋入りが530円、リーフティー（茶葉）が150グラムで450円である（http://www.nittoh-tea.com/）

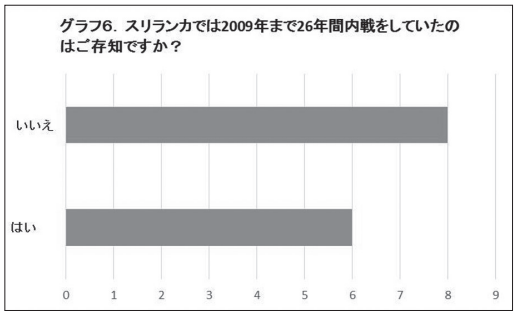
## 2）スリランカと紅茶プランテーション農園労働者について

### スリランカとセイロンティーについて

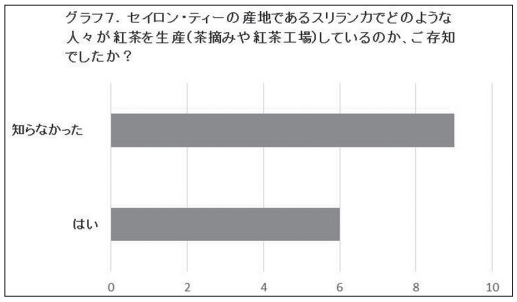
一方、紅茶生産国であるスリランカとスリランカの紅茶プランテーション農園労働者については、スリランカという国は知っているが、どこにあるのか、どんな国なのかなど詳細についてはあまり知らないという事がうかがえる。




さらに、スリランカで内戦が 2009 年まで続いていたことを知っていた人は半数に及ばなかった（グラフ６）。




一方、スリランカで生産されるセイロンティーが、どのような人々がどのような状況で生産しているのかを知っている人も半数に及ばなかった（グラフ７）。

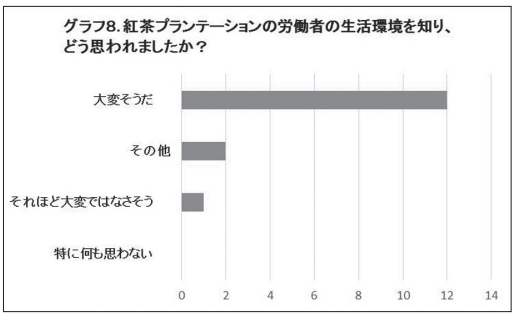


今回のアンケート回答者には、もともと紅茶に興味がある方が多い。アンケートで「知っている」と回答した方の中にも、紅茶教室で知った、紅茶が好きで、自分で調べて知っていた、というコメントもあり、一般的な紅茶消費者の間においては、紅茶生産側の状況は、これ以上に知られていないと言える。

### 紅茶プランテーション農園労働者について

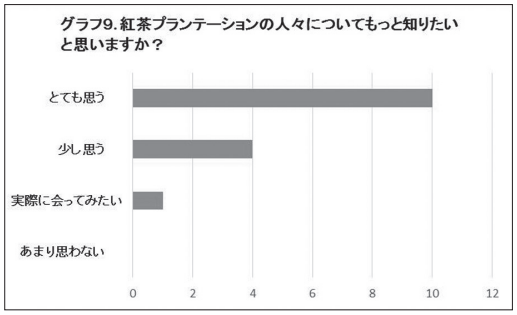
スリランカとセイロンティー生産者については、紅茶を特に好きな方、興味がある方でも意外に知られていないということが今回のアンケートから浮き彫りになった。

一方で、スリランカの紅茶プランテーション農園労働者に対しての思いや支援の可能性などは、積極的または好意的なものが多かった。紅茶プランテーション農園労働者に対する印象もグラフ８から見て取れる。



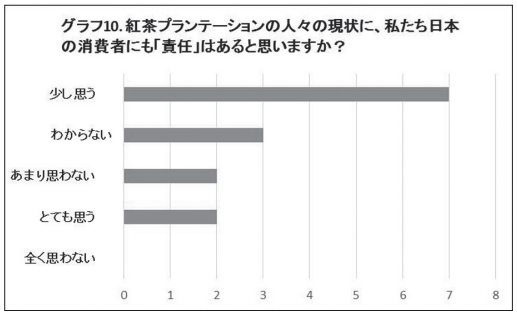

ほとんどの回答者が「大変そう」とし、そのほかには「それほど大変ではなさそう」という回答があった。「その他」と回答した方は「英国植民地政策の影響なので」というコメントが記されていた。

また、紅茶プランテーション農園の人々についてもっと知りたいかという問いに対しては、「とても思う」と「少し思う」が大半を占めており、紅茶生産者側の状況については関心があることが分かる（グラフ９）。




一方、紅茶プランテーション農園の人々の現状について、日本の消費者に責任があると思うかという問いに対してはとても興味深い回答が得られた。

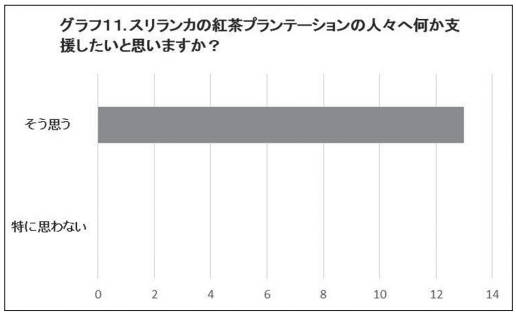
筆者としては、このアンケートにおいて最も知りたい問いである、この設問に対しての回答は様々なものである（グラフ 10）。




全体的には「少し思う」が最多ではあったが、その次が「わからない」、そして「あまり思わない」と続き、「あまり思わない」と「とても思う」が同列である点は興味深い。必ずしも同じ傾向でその多少の違いではなく、それぞれの意見が分かれており、スリランカの紅茶プランテーション農園の労働者の現状は確かに大変そうということで統一された方向性があるが、それが日本の私たちにも関係があるのか、ましてや責任があるのかと問われると、その回答は統一されていない。今まで紅茶は飲んできたが、生産者側がどんな暮らしなのかを知らずに、講演会を通してその現状を知り、その場で「責任はあるのか？」と問われても即座に回答できるものでもない、ということも考察できる。

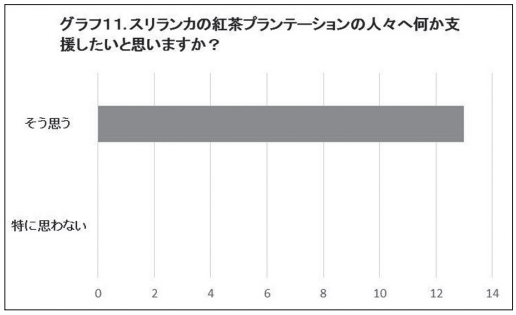
「わからない」、「そうは思わない」と回答した方の中には、コメントを記入した方もおり、「消費者との直接的な関係は薄い」というコメントが２件、「フェアトレードを広めるべき」というコメントが１件、また、「流通過程の中で介在している人々の中に搾取している人々がいる」とのコメントが１件あった。すなわち、問題は認識はしているが、日本の消費者以外に、この問題を解決すべき人々がいるのでは、という意見である。

また一方では、紅茶プランテーション農園の人々へ何か支援をしたいと思うかという問いに対しては、すべての回答が「そう思う」であったのは興味深い。「日本の消費者に責任があるか？」という問いに対して意見は分かれるが、「支援はしたいか」という問いに対しては答えが一致しているということである（グラフ11）。




「消費者の責任はあるか？」についての意見は分かれるが、支援をしたい気持ちはあり、それは回答者１名からのコメント「他のどの国の貧困などと同じ意味で支援したい」というコメントに代表されるともいえる。責任の所在はともかく、そこに貧困から抜け出せない人がいるのであれば、そして、そういう人がいると知ってしまえば、やはり支援をしたいという気持ちともいえる。

支援の方法についても様々な意見が出た（グラフ12）。




一番多かったのは「支援の仕方をもっと知りたい」と「フェアトレード等の紅茶の購入」であった。「フェアトレード等の紅茶の購入」という意見は、記入されたコメントも参照すると、現時点ではフェアトレードが思い浮かぶ唯一の方法であると取れる。すなわち、「支援の仕方をもっと知りたい」ともつながる意見であると言える。

これらを総括すると以下のようになると言える。

・紅茶はすでに日常生活に溶け込んだ飲物である
・セイロンティーはスリランカ産とは認識していたがスリランカ自体のことはあまり知らない
・セイロンティー生産現場である紅茶プランテーション農園の人々の現状も知らなかった
・日本の消費者に紅茶プランテーション農園の人々の現状に対して責任があるのかはよく分からない
・しかし、困っている人たちがいるのであれば支援したい
・その支援方法もあまりよく分からないのでもっと知りたい

このように整理されると、今後どのようなアプローチが適切であるのか、誰が何をすべきなのか、道筋を見出すヒントが見えてくる。

**2.消費者の責任か？または大義か？**

紅茶は日常に浸透した飲物であり、家に常備されていること、家庭によっては高級な茶葉やフレーバーティーなども飲んでいることは、今回のアンケートでも見て取れ、日常生活に紅茶が浸透しているといえる。

その一方で、どのような人々が紅茶を生産しているのかは勿論のこと、日本への紅茶輸入元の第１位であるスリランカという国自体でさえもあまり知らないことが浮き彫りになった。すなわち、紅茶は日常的に飲んではいるが、どこでどのように生産されているのかはあまり知られていないということになる。

そんな紅茶の生産者の現場での、植民地然とした生産体制と暮らしに対して、消費者は責任があるのかと問われれば、それはすぐに回答するには難しい問題であるとアンケートからは垣間見られる。しかし支援に対しては積極的であり、それは他の途上国等の貧困への支援となんら変わりはない。

このことから考察できることとして、この紅茶プランテーション農園の人々の問題は、消費者の責任を問うことよりも、大義の問題と取れるのではないだろうかという点である。

日本語で大義というと非常にあいまいであり、通常使われない言葉でもあるので、実感としてあまり認識できないものであるが、一般的な途上国への支援や、国内での様々な社会的弱者への支援と同じ感覚で、その手をスリランカの紅茶プランテーション農園の人々にも伸ばすという捉え方をすると、非常に明確にとらえることが可能である。

近年活発に行われている企業の社会的責任・貢献（Corporate Social Responsibility: CSR）は企業活動の一環として、その責任を明確化した上で支援活動や社会福祉等を通して還元するものであるが、これを大義に置き換えると、また新たな切り口が見えてくる。

今後、紅茶プランテーション農園の人々の暮らしの現状と日本の消費者側の大義をどのように明確化し、説明責任（accountability）を形成するかを追究する必要性が、今回のアンケートを通して見出された点である。

**おわりに**

大義はこれからの研究を進めるにあたって一つの課題であることに間違いはないが、しかし、やはり、これらはスリランカという、ひとつの国が抱えていかなければいけない問題なのだろうか？日本への紅茶の輸入はスリランカが１位であり、紅茶飲料をはじめ､日本人の日々の暮らしにも紅茶は浸透している。

紅茶という産物を通して、消費者側コミュニティが生産者側コミュニティに対してどのような責任があるのか、またはないのか、もしくは、スリランカ一国の問題で済まされるものなのか、これらを検証することが今後必要である。

アンケートでも浮き出てきたように､「もっと知りたい」という意見は、まずは全体像を知らない限りは判断できないという気持ちが表れており、その上で判断したいと解釈できるが、現時点ではこのような状況を積極的に社会に告知・周知する媒体はあまり存在しない。NGO なども活動しているが、やはり紅茶関連企業等と比べるとその認知度は低い。

紅茶という良いイメージを持った飲物に対するネガティブなイメージとも受け取られかねないことでもあり、紅茶飲料メーカーや紅茶店などはあまり積極的に告知しようとする動きは見られない。しかし、今回のアンケート結果でも見えてきたように、消費者は必ずしも紅茶店や飲料メーカーに責任があるとはとらえておらず、また、支援したいという動機づけも「責任」よりは「大義」が動機づけになっている可能性が高いこともあり、アプローチの仕方によっては消費者と紅茶店、飲料メーカーなど双方にとって有益な関係を保ちつつ、スリランカの紅茶プランテーション農園で暮らす人々への支援へとつなげることも可能である。

# アンケート　「セイロン・ティーとプランテーション労働者」

## 紅茶の産地スリランカをより知ってもらうために...

セイロン・ティーはスリランカの中部高原地帯から同国南部にかけての 400 以上の紅茶プランテーション農園によって生産されています（セイロンの名はスリランカの旧名ですが、国名変更後もセイロン・ティーの名がすでに世界で浸透していることから現在でも使用されています）。

高級茶は主に中部高原地帯のヌワラエリヤなどで生産されており、紅茶プランテーション農園で働く労働者およびその家族は約 100 万人といわれています。彼らの生活環境を改善するために、さまざまな取り組みがなされていますが、状況は遅々として改善されていません。そのため宇都宮大学国際学部栗原俊輔研究室では、新しい取り組みを模索すべく、スリランカの紅茶プランテーション労働者のコミュニティと日本の消費者のコミュニティを結び付け、双方にとって有益な交流をはかれる道筋を探していく計画です。
忌憚ないご意見および感想等、多くのコメントをお待ちしております。

**まず添付の資料をご覧のうえ、下記質問にお答えください**

アンケート記入日（　　年　　月　　日）

## 1.　紅茶について

**1）日ごろ、どれくらいの頻度で紅茶を飲んでいますか？**

1．毎日　2．週に 2～3 回　3．月に 2～3 回　4．自分から進んで飲むことはない（家族・友人が淹れてくれたときだけ）　5．その他（　　）

**2）どんな機会に紅茶を飲みますか？**

1．日ごろの飲み物として家に常備　2．スイーツ等を買ってきたとき　3．家では飲まず喫茶店、カフェなどでしか飲まない　4．来客があったときに出す　5．その他（　　）

**3）紅茶について、どのような印象を持っていますか？**

1．高級感がある　2．日常の普通の飲み物　3．特に何も無い　4．その他（　　）

**4）どのような紅茶を飲むことが多いですか？（複数回答）**

1．普通のティーバッグ　2．普通の茶葉　3．専門店で売られているプレーン・ティー　4．専門店で売られているフレーバー・ティー　5．普通の紅茶と専門店で売られている紅茶の両方を飲む　6．その他（　　）

**5）紅茶には何を求めて飲んでいますか？（複数回答可）**

１、癒し　２、美味しさ　３、優雅さ　４、健康　５、特になし　６その他（　　）

**6）紅茶にかけるひと月の費用はいくらぐらいですか？**

1．1000 円以下　2．1000 円～3000 円　3．3000 円～5000 円　4．5000 円以上/月（　　円）

## 2.　紅茶の価格について

**1）日ごろ愛飲している特定の紅茶はありますか？**

a.（愛飲している紅茶の銘柄等：　　）　b.（日ごろ紅茶を購入する店：　　）
c.（愛飲している紅茶の価格：　　）

**2）市販されている紅茶の価格についてどう思われますか？**

1．手間を考えるともう少し高くても良いと思う　2．適正　3．もう少し安い方が良い（その理由がありましたら教えてください：　　）

## 3.　スリランカという国について

**1)　セイロン・ティーの産地はスリランカであることをご存知でしたか？**

1．はい　2．いいえ　3．思っていた国とちがった（　　）

**2)　スリランカの位置（どこにあるのか）をご存知でしたか？**

1．はい　2．いいえ　3．思っていたところと違った（　　）

**3)　スリランカと聞いて何か思い浮かぶことはありますか？**

1．はい（　　）　2．いいえ

**4)　スリランカでは 2009 年まで 26 年間内戦をしていたのはご存知ですか？**

1．はい　2．いいえ

## 4.　紅茶プランテーション労働者について

**1)　セイロン・ティーの産地であるスリランカでどのような人々が紅茶を生産（茶摘みや紅茶工場）しているのか、ご存知でしたか？**

1．はい（どうやってしりましたか？　　）　2．知らなかった

**2)　紅茶プランテーションの労働者の生活環境を知り、どう思われましたか？**

1．大変そうだ　2．それほど大変ではなさそう　3．特に何も思わない　4．その他（　　）

**3)　紅茶プランテーションの人々についてもっと知りたいと思いますか？**

1．とても思う　2．少し思う　3．あまり思わない　4．実際に会ってみたい

**4)　紅茶プランテーションの人々の現状に、私たち日本の消費者にも「責任」はあると思いますか？その理由もお聞かせください**

1．とても思う　2．少し思う　3．あまり思わない　4．全く思わない　5．わからない

（　　）

**5)　スリランカの紅茶プランテーションの人々へ何か支援したいと思いますか？**

1．そう思う　2．特に思わない

**6)　支援をしたいと思った方：　どのような支援・かかわり方をしたいと思いますか？**

1．寄付等　2．実際に現地を訪問し支援したい　3．フェアトレード等の紅茶の購入

4．支援の仕方をもっと知りたい　5．その他（　　）

## 5.　回答者基本情報

下記情報をお知らせください。可能な範囲で構いません

**1)　性別**　1．女　2．男

**2)　年齢**　1．20 代　3．30 代　4．40 代　5．50 代　6．60 代　7．その他（　　）

**3)　お住まいの地域**

1．宇都宮市　2．宇都宮以外の県央（　　）　3．県北（　　）

4．県南（　　）　5．その他（　　）

**4)　ご職業**

1．会社員　2．自営業　3．公務員　4．リタイア　5．学生　6．その他（　　）

**5)　紅茶との関わり**

1．消費者（紅茶の購入）　2．販売者・カフェ喫茶店等　3．その他（　　）

このアンケートは、宇都宮大学国際学部国際社会学科栗原俊輔研究室における、紅茶を通した双方向の国際理解と国際交流・協力の可能性調査研究にのみに使用され、ご記入いただいた情報はそれ以外に使用されること、また第三者へ渡されることはありません。

（添付資料）

# スリランカ 紅茶プランテーション労働者とセイロン・ティー

栗原俊輔
宇都宮大学国際学部専任講師

## 紅茶プランテーション農園 － セイロン・ティーの生まれる場所

紅茶プランテーション農園

- **プランテーション農園**

単一作物農業のことで、イギリス植民地時代にスリランカへ導入された。現在紅茶のほかにもゴムやココナツのプランテーションも。

- **エステート・タミル人（農園タミル人）**

プランテーションの安価な労働力として、イギリスによってスリランカへ移入されたのが、南インドのタミル人である。現在もプランテーションで、農園経営者の統括管理下で暮らす。

- **プランテーションと農園タミル人**

農園に代々住み、農園内労働者として働くタミル系住民にとっては、戦後も支配層が変わっただけで、その労働・居住環境はプランテーションが導入された１９世紀当時から何も変わっていない。

## 紅茶プランテーション労働者の毎日

労働者の住居

- **農園内で完結する暮らし**

植民地時代から代々労働者として同じプランテーション農園に住み続けている。子どもは中学を卒業すると同時に労働者として農園で働く。収入は必ずしも低くはないが、農園経営者の管理下で、農園内には、中学までの教育機関や診療所など生活に必要な施設は整っている。しかし、今日のスリランカ国内の水準と比べてかなり見劣りがするが、改修もあまり行われていない。

- **単調な暮らしと風紀のみだれ**

日々の生活は単純労働の繰り返しで、さしたる娯楽もない中、男女を問わず飲酒に走る傾向があり、少なくない収入もその費用に消える家庭も多い。アルコール中毒は、農園コミュニティでは深刻な問題となっている。若者の将来へのあきらめの気持ちから来る未就労も深刻である。

## お金ではなく尊厳・尊敬を

雨の日も裸足で茶を摘む労働者

- **無国籍からスリランカ市民へ**

戦後スリランカが独立した際に、インドとスリランカのあいだでプランテーションのタミル人の国籍問題が浮上し、1988 年までは無国籍であった。そのため、行政サービス等が政府からは受けられず、代わりにプランテーション会社が担い、農園内での生活が保障されてきた。

- **市民としての選択肢**

現在はスリランカ市民であり、自分自身の選択肢を自ら考えて選ぶということがなかったコミュニティも、今では外の世界を知り、紅茶プランテーション労働者以外の選択肢もあるという事を知っている。

- **市民としての自立の道**

長年限られた世界で生きてきた紅茶プランテーション労働者の生活も、プランテーション会社がすべてを供給していた世界から、市民としての責任を果たすと同時に、自らの問題を認識そして解決する自由とその能力が求められている。

- **真の市民となるために**

コミュニティとして問題を発見、分析し解決方法を探ることや選択肢を吟味する機会は少なく、いま始まったばかりである。これを支援することが、彼らが真の意味での市民となるためにも不可欠である。